

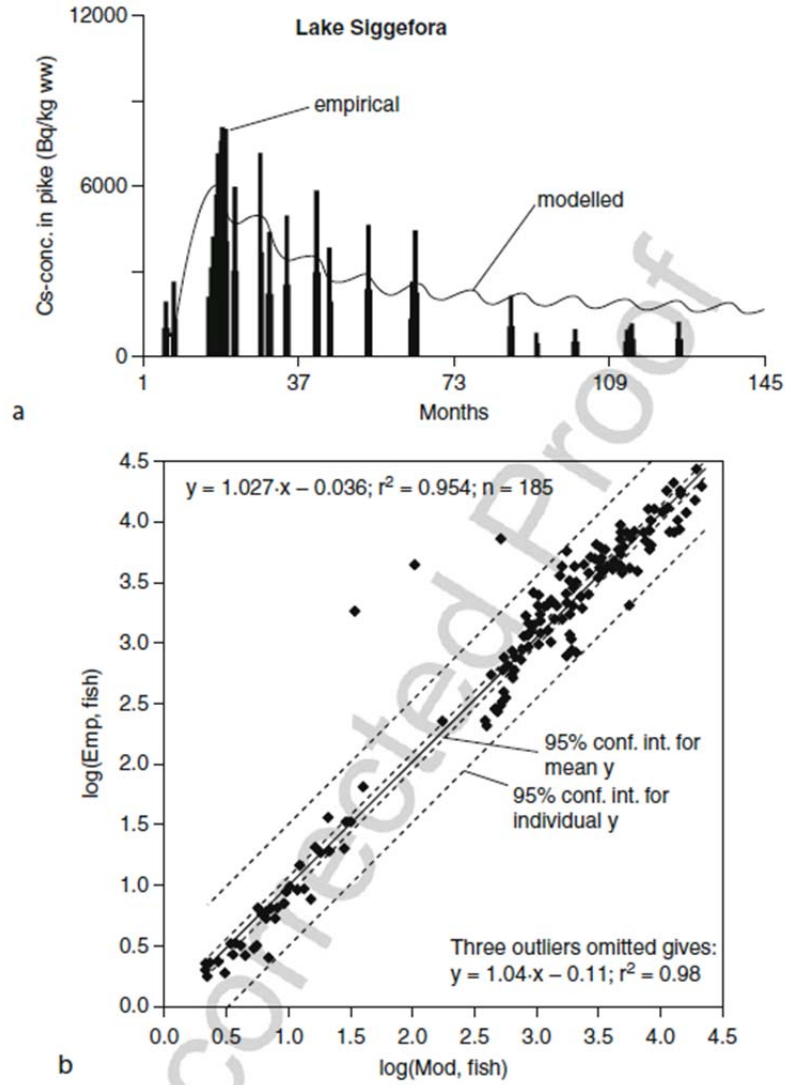
## 1. 基本情報

区分	河川	担当者名	松永 武
タイトル (英文)	Nuclear Accidents: The Fate/Behavior of the Chernobyl Fallout in Scandinavian Watersheds		
タイトル (和文)	原子力事故：スカンジナビア地域におけるチェルノブイリ事故フォールアウトの環境動態		
キーワード	radioecology, remedial measures, empirical dataset, predictive model, Scandinavian watersheds		
著者	L. Håkanson		
文献	Springerreference, <a href="http://www.springerreference.com/docs/html/chapterdbid/226395.html">http://www.springerreference.com/docs/html/chapterdbid/226395.html</a>		

### (1) 対象地域

チェルノブイリ事故で放射性汚染の影響を受けたスカンジナビアならびに欧州の湖沼・河川・沿岸域

### (2) 重要な図表



Nuclear Accidents: The Fate/Behavior of the Chernobyl Fallout in Scandinavian Watersheds. Figure 17

(a) The relationship between empirical data and modelled values for radiocesium in 500 g pike in Lake Siggefora, Sweden and (b) results of model validation for lake fish from 185 samples from different types of fish from European lakes (Modified from [19])

## 2. 提言につながる情報

---

### (1) モニタリングへの活用

観測を行うにあたり、事態の将来予測を前提にするならば、最も影響の大きな環境因子を推定して、それらに観測の重点を置くべきである。この推定の段階においても、生態圏モデルが有効である。

### (2) 流出挙動・経路

河川・湖沼へ核種の到達には、地表面からの二次的な移動と、水面への直接降下の両者がある。後者は、水面が広いとき、そして事故後の早期の時点では無視できない経路となる。

### (3) 除染の際の留意点

水生生物への核種移行を抑制することは、水の交換が遅く、本来の K イオン濃度が低いなど、限定された自然条件以外の環境では困難と認識すべきである。

### (4) 担当者のコメント

生物を含めた水圏全体での核種の物理化学的・生物学的循環の視点で、実地観測をどう行い、そしてどう予測モデルにつなげるかを論じている。やや、概念的な性格はあるが、人の被曝線量低減を究極の目標にして、生態圏構成要素の核種濃度予測という明確な目的の下で行うべき観測の在り方を考えさせられる。用語説明の章、そして関連文献リストが充実し、“事典”としても活用できる。